岡山大学

PRESS RELEASE

平成２２年　４月２２日

幼児の道徳判断は大人とは違う？

＜概　要＞

岡山大学大学院教育学研究科 林 創 講師は，このたび「幼児の知識状態に基づく作為と不作為の道徳判断」という研究結果を，発達心理学の国際学術雑誌 *Infant and Child Development* の最新号に発表しました。

これまで，子どもは**既に幼児期の 4～5 歳頃から，「意図」（わざとか／わざとでないか）に基づいて他者の行動の善悪を判断できる**ことがわかっています。これに対して，今回林講師は，**「知識状態」（大事な情報を知っているか／知らないか）に基づいて他者の行動の善悪を判断できるかどうかを検討したところ，道徳判断に際して，幼児は「知識状態」の手がかりをあまり使わないことがわかりました。**しかもこれは，悪事に言動が伴う「作為」だけでなく，言動が伴わない「不作為」においても同様でした。

知識状態は，悪い結果を予測できたか否かという「予見可能性」に直結します。それゆえ，**幼児は道徳判断に際して，意図は考慮するが，大人とは違って結果の予見可能性にはあまり注意を払わない**という興味深い事実がわかりました。これは，子どもの心の特徴とその発達的変化を知る上で，重要な知見といえます。

＜背　景＞

他者の行動を見て，直観的に良いか悪いかを判断する「道徳判断」は，人間に備わる最も重要な心の働きの一つです。これまでの心理学研究により，既に幼児期の 4～5 歳頃から，「意図」（わざとか／わざとでないか」に基づいて他者の行動の善悪を判断できることがわかっています。しかし，意図だけでなく，大人は「知識状態」（大事なことを知っているのに悪いことをしたか／知らないから悪いことをしたか」も道徳判断の手がかりとして使っています。本研究では，子どもも，このような手がかりを使うのかどうかを検討しました。

＜研究方法と結果＞

幼児を対象に，お話①とお話②をアニメーションで提示しました。2 つのお話は男の子の行動（例：落書きをする）によって，女の子を悲しませる結果を生み出すという点で同じですが，唯一の違いは，男の子が「結果を予見できる重要な事実」（例：画用紙は女の子のものであること）を知っている（お話②）か否か（お話①）でした。

その結果，**幼児の多くは，知識状態質問に正答できた（お話②を選んだ）のですが，道徳判断質問では，多くの幼児は，お話②の方がより悪いとは判断せず，大人とは違った反応が見られました。**しかもこれは，悪事に**言動が伴う「作為」だけでなく，言動が伴わない「不作為」においても同様**でした。

知識状態質問：「どちらの男の子が，画用紙が女の子のものと知っていますか？」
道徳判断質問：「どちらの男の子が，より悪いことをしましたか？」

＜本研究のインパクト＞

本研究の結果から，**他者の心の状態に敏感になると一律に道徳判断が大人に近づくわけではなく，「意図」と「知識状態」では違いがあり，「知識状態」に基づいた判断は幼児には難しい**ということがわかりました。知識状態は，悪い結果を予測できたか否かという（法律の 1 つである「刑法」での）「予見可能性」に直結します。それゆえ，本研究の結果は，**大人とは違って，幼児は道徳判断において，意図は考慮するが，結果の予見可能性にはあまり注意を払わないという興味深い事実**を示します。これは，幼稚園や保育園の先生方などが，これまで見逃しやすかった点といえる可能性があります。それゆえ，本研究で得られた知見は，幼児期の教育実践現場での指導がより有益なものとなる意味ももつことでしょう。

発表論文：Hayashi, H. (2010). Young children's moral judgments of commission and omission related to the understanding of knowledge or ignorance. *Infant and Child Development, 19*, 187-203.
DOI: 10.1002/icd.641　（オンライン公開）

＜お問合せ先＞ 岡山大学 大学院教育学研究科 講師　　林　創（はやし はじむ）
Tel & FAX:　086－251－7713（研究室直通）　Email:　hajimu@cc.okayama-u.ac.jp